自分の町は自分で守ろう　（日野町消防団長　宮脇光男）

昨年１０月６日午後１時３０分、鳥取県西部を震源とするマグニチュード7.3の地震が発生し、日野町は震度6強により町全体が多大な被害を被りました。これだけの災害にもかかわらずひとりの死者もなく、火災も発生しなかったことは不幸中の幸いでした。

消防団員も被災者のひとりでありましたが、発生直後から、昼夜を問わず献身的に防災活動に従事していただいた団員各位に深く敬意と感謝を申し上げます。

発生5分後には、災害対策本部を設置し、サイレン及び防災無線などにより団員を招集しました。これに呼応して、根雨・黒坂の指定場所に終結した団員は約15名。時間の経過とともに、仕事先から帰って集合してくる団員も増えてきました。第1、第2分団両副分団長指揮のもと初動体制に入りました。住民から次々と情報が寄せられ、真住及び下榎で人的被害の報により、広域消防と連携して両方ともに無事救出することができました。

消防団の使命は、第1が人的災害救助活動、第2が財産保護のための活動です。そのためにも早く確実な情報を収集すること、自主的避難の呼びかけをすることの指示を出し、少ない体制ながら精一杯の努力をしましたが、なにせこれだけの大規模な災害にあって、住民の皆さんの様々な要請に対し、速やかに且つ十分な対応ができなかったということが残念でなりません。このような状況下では、人的救助を優先せざるを得ません。さらに、団員を効率的に動かすためには、なによりもまず確実な情報が必要となります。

災害が発生したときには、一人ひとりが慌てず、適切な行動を取ることが必要です。そのためには、日頃から関心を持って正しい心構えを身に付けておくことが必要です。ぜひ家族会議で、家の中ではどこが安全か、幼児やお年寄りの誘導、避難場所と経路の確認、救急品等のチェック、家族間の連絡方法など、時間帯や季節による違いも考えて相談しておいてください。また、「自分の町は自分たちが守る」という意識を持って、住民一人ひとりがきめ細かい活動をすることが重要です。このことが自主防災組織の始まりとなるものです。

近年、社会情勢の変化により、消防団は団員数の不足や高齢化等により活動の支障が出ています。本町でも同様であり、さらに、町外へ通勤する団員が増加したことにより、昼間時の団員数が極めて少ないという状況です。全国的には、女性団員が増加傾向にあり、1万5千人が女性特有のきめ細かさを生かして活躍中です。本町でも女性団員に、自分の町を守る新しい原動力になっていただきたいと念願しております。

「早く元気になってね」気高郡の勝谷小学校5年生が町内の小学生に千羽鶴をプレゼント

子どもたちとともに　（根雨保育所長　河平芙美子）

あの未曾有の大地震から一年が経とうとしています。たいへんな状況の中、保護者、地域の皆様と職員が一体となり、子どもたちの命を守ることができたことを、心から感謝しています。

まさに大地震でした。わたしたち職員は、突然地の底から突き上げてくるような激しい揺れ、いつまでも続く余震に、一瞬「何事だ。この世の出来事か」と疑う状況でした。子どもたちは各保育室で昼寝中でした。遊戯室の防煙用ガラスが落下、床に散乱して非常に危険な状態の中、職員は必死で子どもたちを布団ごと机の下に引き入れ、名前を何回も呼び起こし、人員点呼するとともに、不安がる子どもを励ました。地鳴りとともに、何度も起きる余震に子どもたちは、机の下で恐怖におののき、すすり泣く声がしていました。

子どもたちを避難場所にいつ誘導するのか、ずいぶん考えました。園庭は狭く、いろいろな遊具や鉄柱などがあり、タイミングが悪ければ命にかかわると思っていました。一時間ほど過ぎた頃から、多少余震が少なくなったのをみはからって、０、１、２歳児は避難車に乗せ、３、４、５歳児は徒歩で園庭に集まり、日野病院の駐車場に避難しました。その間、病院が停電になったため、電源を確保するため重症患者数名が当所に避難してこられました。地震発生直後から、数人の保護者が駆けつけてくださり、たいへん勇気づけられました。また、避難先では、患者さんや病院職員の皆さんが大勢おられて、「皆と一緒なんだ」という安心感を得ました。時間の経過とともに、次々と迎えに来られ、全員無事保護者にお渡しできたとき、「本当にみんな無事でよかった」と、涙が止まりませんでした。少しでも間違えたら何が起きても不思議ではなかった状況でした。

今回の体験から、人間は自然の中で生かされていると実感しました。だからこそ、人間同士の支え合いとつながりが大切だと感じました。２１世紀を生き抜く子どもたちが、この体験を忘れることなく、命を尊び、心豊かに人とのつながりを大切に、たくましくしく成長してほしいと願っています。

町図書館で人形劇を楽しむ子供たち、震災後、さまざまなチャリティーイベントが町内で開かれ、元気づけられた

地震が来た！　（日野病院総婦長　枝原瑞江）

大きな揺れのあと、ただちに看護婦は病室を巡回し、患者さんに声かけと安否確認をおこないました。避難命令が出ると、74名の入院患者さん(独歩35名、護送8名、担送31名)を１階病棟、２階病棟、３階病棟と順次中央階段を伝い、玄関前の駐車場に連れて出ました。歩行可能な患者さんは４～５名ずつ、１本のロープにつかまって避難しました。車椅子の方は、職員が両サイド持ち上げ階段を下ります。担送患者さんは敷布団のまま、職員３～４名で抱えて出ました。長椅子、キャスター付きベッド、布団等を運び出し、患者さんの寝る所を確保しました。各病棟責任者は、最後病室を回り全員の避難を確認しました。このようにして当日勤務の職員、看護婦２８名、医師８名事務職ほか４７名、総勢８１名で避難を完了しました。この間約２０分でした。幸い、患者さんの上に物が落ちたり、ベッドから転落した等の事故はありませんでした。点滴や酸素吸入中の患者もありましたが、トラブルもなく避難できました。いったん病院正面玄関の駐車場に出て、根雨社会体育館に移動しました。院内は電灯が大きく揺れていました。

患者さんにとっては、看護婦や職員の励ましは心強いものがあったのですが、自宅のことはさておいても駆けつけて来られたご家族の顔を見ることは、百倍の勇気が出たことと思います。

その後、電話は鳴りっぱなしでしたが、その対応がスムーズだったとはいえません。日野病院の患者さんは全員無事だということをどのようにしてご家族に伝えられるようにするのか、これが今後のテーマです。

小学校が避難所に　（黒坂小学校校長　青戸哲範）

10月6日の鳥取県西部地震は、たいへんな自然災害であり、大きな被害を爪跡として地域に残した。この地域で生活している私たちに様々な影響を与えた。振り返ってみるとき、私は平生の何も感じない当たり前の生活が一番良いのだと思うようになった。

学校で児童生徒を預かるものとして、当日、全員無事に緊急避難できたことが何よりだった。児童全員の下校を見届けた後、この非常事態から学校再開に向けての動きとともに、地域の方々の避難所として学校を使用されることへの対応は、その時その場での判断が優先され、誰かにゆっくりと相談できる余裕はなかった。ときに失礼なことがあったかもしれないが、お許しいただきたい。

全国ニュースとなり、各地の知り合いからの安否の問い合わせと激励を頂いた。今回の災害を通して、人は多くの人のお世話で生活ができていることを再確認したり、人生には、良いこと悪いこと苦しいこと、そして我慢しなければならないこと等々、多くの出来事があることを知ったり、いろいろな体験を数多くした人ほど生き方に幅ができてくることを改めて知ることができた。地震発生時の天気、季節、時刻、居場所などによって、大きく変わる対応と結果、非常時と平常時の対応の違いも当然あると思う。平常時は管理規則が優先するだろうが、緊急非常時には、現場責任者のその時その場での、冷静で誠意ある、ベターな判断と行動が大切ではないかと思った。もちろん、事後報告と説明の必要がある。このことは勤務時間や勤務内容からは対応できないことでも、人としての生き方の問題で対応できると思った。前例もなく無我夢中でやった現場対応を評価された時、ホッとすると同時に、貴重な体験となった。いっしょに勤務した同僚の、「学校の施設設備は自分たちが一番よく知っているから」と、職場をあげた24時間の協力体制は心強く感じたし、地域の方の役に立つことができて本当によかったと思っている。

二度の大地震を体験して（黒坂　田代志津子）

わたしは、阪神淡路大地震と鳥取県西部大地震の二回の大震災に遭遇しました。親子ともども無事であったことが何よりだったと思っていますが、なにか運命的なものを感じています。ただ、今でも二人の子どもたちは、なにかの弾みで大きな振動があると、小学校時代に体験した震災の恐怖感が染み付いているのでしょう、とても神経質になり体中に震えがくるようです。

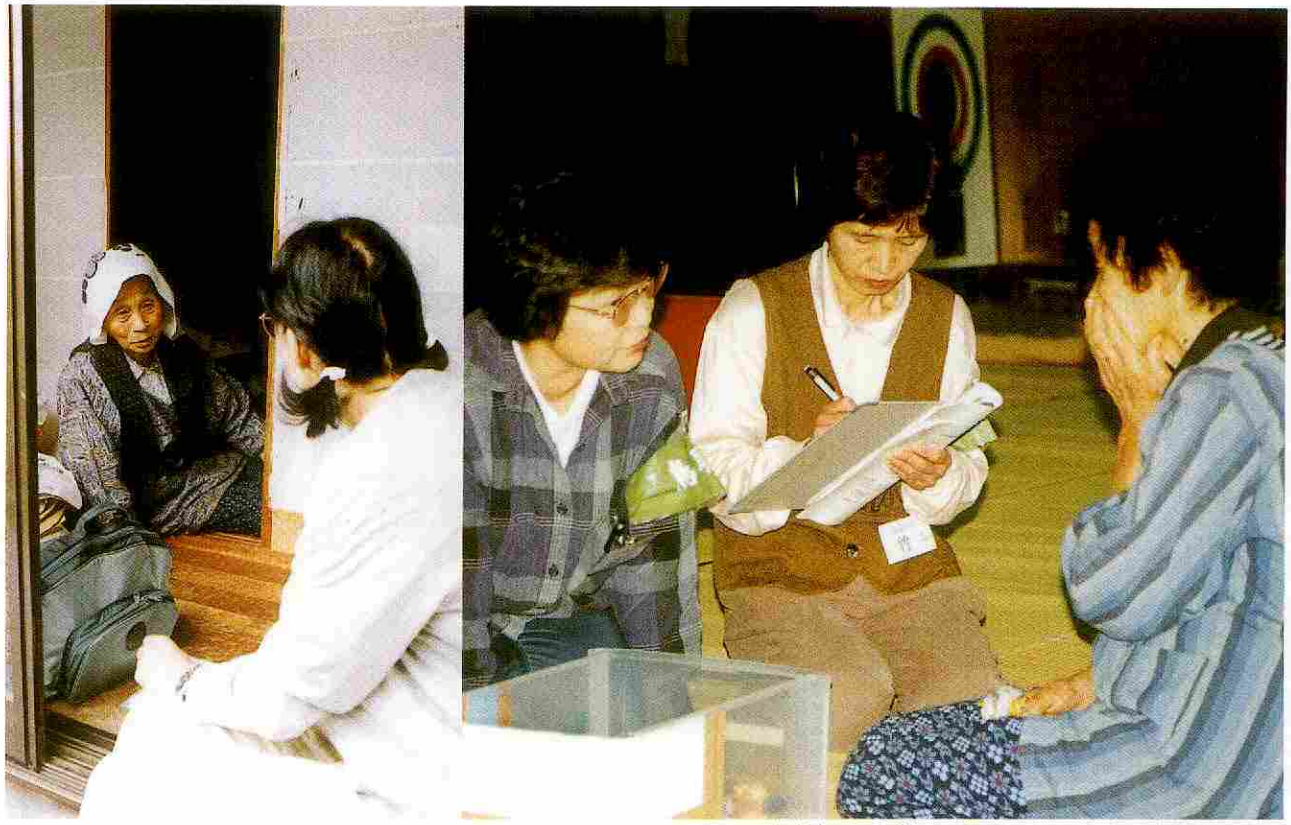
阪神淡路大地震は、多くの尊い人命を奪いました。今回は負傷された方がありましたが、人命には異常がなく、黒坂では互いに被害を受けながらも助け合いの気持ちのなかで避難生活を送ることができました。これは、日ごろからコミュニティが十分にはかられているからでしょう。ふるさとに帰ってきてからずっと感じていた、田舎ならではの人情味あふれた良さだと思います。黒坂地区の皆さんにとっては、初体験の避難生活だったことでしょうが、自分たちの手で炊き出しや生活の支え合いが、何の気取りもなく、平然と行われていました。ですから、私は、阪神大震災のときとはまた違った思いで、人の温もりを強く感じながら、避難所生活第一夜を過ごせたのです。

一夜明けて、それぞれ自宅の被害状況を確かめ、後片付けなどに励んでいるとき、黒坂の町にはいろいろな人がやってきて、とてもにぎやかでした。報道関係の対応をしている人、後片付けに追われながら、ボランティアの人に感謝しているお年寄りなど、さまざまな光景を、私は、阪神淡路大地震のときとダブらせて見ていました。

心温かく人情味あふれた黒坂の人たちが、外部から入ってきた多くの人の中の、一部の心ない人のために、悲しい目にあわなければ良いがと願いながら、子どもたちとわが家の後片付けに取りかかりました。

ありがたかったファックス情報（根雨　藤原正治）

10月6日、午前中は畑に行き、昼食後、家で休んでいたら1時半頃、突然のものすごい大きな揺れでびっくりしました。地震が起きたら柱の多くある廊下に逃げると決めていたので、そこに移動し、じっと座っていました。あまりの揺れになかなか歩くこともできず、妻は血圧が上がったような気がしたと言っていました。整理ダンスは揺れのため60センチメートルほど移動しており、２階の洋服ダンスや本棚は倒れてバラバラになりました。阪神大震災で被災した姉からの忠告で、以前から棚等にＬ型の金具で壁に固定していたので食器棚は無事でした。大きな揺れはおさまりましたが、余震はたびたび続きました。自宅で頑張ってはみましたが、不安がつのり避難所に移動して、皆さんと一緒に情報を得たり食事をとったりしました。避難所は一週間くらいかなと思っていましたが、余震がおさまらず、私たちは夫婦で耳が聞こえないため、とくに夜が不安で、結局10日間いることになりました。その間、東京にいる息子がテレビで私たちを見たとファックスをくれました。その他、日本聴力障害新聞と聴覚障害者専門テレビ放送の取材も受けました。町からは、家屋修復のため補助金をいただきましたし、無線放送が聞こえないかわりにファックスで連絡を下さるようになりました。本当にありがとうございました。



保健婦や看護婦による心のケアや健康相談の巡回

地震における行動 （日野町役場総務課　池田俊弘）

まさか日野町にこんな地震が来るとは想像だにしませんでした。発生直後、通りかかった薮津橋付近では、落石と土砂くずれにより国道が不通になっておりました。くずれた土砂に一台の車が半分埋まっていました。その運転手さんの無事を確認したあと、ようやく役場に到着したのは午後３時ごろでした。役場では、「家が倒れかかっている何とかしてほしい」「裏山がくずれかかっている」など緊急を要する電話がひっきりなしかかってきました。すぐに対応できず、「危険を感じたらすぐ避難してください」と言うのが精一杯の状況でした。

対策本部で私は、自衛隊や県との連絡調整や、ブルーシートの調達とヘリコプターの依頼などさまざまな業務に追われました。とりわけマスコミの対応には苦慮しました。ただでさえパニック状態のなか、次から次へとテレビ局や新聞記者が来て同じ質問を繰り返すのです。あるとき、せっかく屋根に張ったシートが、低空取材するヘリコプターの風圧のためはがれ飛んでいるとの情報が入ったときには、いくら報道の自由とはいえ、相手の、しかも被災者の立場を考えた取材をすべきだと怒りを禁じ得ませんでした。

職員は二日間ほとんど徹夜でしたので、皆疲れ、気が高ぶっており、口論することもありました。いま振り返ってみると仕方ない状況だったと思います。

久しぶりに自宅に帰ったのは10日の朝まだ明けぬ２時頃でした。迂回路の広域農道を運転しながら、途中何度か路肩に突っ込みそうになりました。家までがやけに遠く感じたことを覚えています。

この震災で、「まず自分の身は自分で守る」という自主防災意識の大切さを痛感しました。普段から近隣で助け合うという気持がいま再び必要ではないでしょうか。

支えあう大切さを学んだ （民生児童委員　佐々木高子　舟場）

昨年10月の鳥取県西部地震から１年が経とうとしております。何世代もの人たちが一生懸命に築きあげてきたものがいかに脆いものかということを、阪神淡路大地震ともあわせて思い知らされました。また、人間が生活を営むうえで、基本は家でありファミリーであり、それがいかに大切かということも、あらためて学ばされました。住宅支援制度、地震災害復興対策事業が、県及び町行政により、それも早い段階で実現されましたことは、町人口の流失を最小限に防げたことと、復興に向けての起爆剤になったのでは、と思います。しかし、このように復興のために設けられたいろいろな補助、支援制度が、該当者、とくに高齢の独居やご夫婦世帯の方々に漏れなく公平に利用されていたのか、また、次々に出される情報が正しく伝わっていたのかどうかという心配があります。お年寄りは、自分で頑張らなくてはという思いが強く、ボランティアセンターにお願いされればやっていただけたのに、無理をしてしまって医療のお世話になったということも聞きました。屋根のシートをかけていただいて本当に助かったという声や、「自分は高齢だけれども、お世話になるばかりでは心苦しいので、何かちょっとしたお手伝いでも」という申し出もありました。高齢者同士がお互いに助け合い支えあうことのできることを知り、この方々に拍手を送りたいほどうれしく思いました。このような状況のなかで、私の立場としては、行政から出されているいろいろな情報を確実にお伝えすること、困っておられることをよく把握することなど、行政の手の届かないところに気配りすることが私たちの活動ではないかと、自分なりに感じたことでした。

私たちは、この突然の災害により、精神的にも経済的にもたいへんな被害にあいましたが、反面、お互いが助け合い支えあうことの大切さを身をもって学ぶことができました。今後、町民ひとり一人がこの貴重な体験を糧に、これからの日野町のまちづくりのビジョンである、『愛と元気なまちづくり』につなげてまいりましょう

商工業者の被害状況 （日野町商工会経営指導員　藤原洋一）

平成12年10月6日、この日は日野町商店街活性化先進事業のチャレンジショップ『出雲街道根雨宿一番館』の開店日であり、わたしたち役職員一同、朝からその準備に追われている最中、いままで体験したことのない自然災害に見舞われたのでした。

日野町商工会としては、ただちに商工業者の被害状況の把握と被害写真の撮影を開始しました。当初、108の事業所から263件、9億6871万円（建物関係101件・4億441万円、敷地駐車場関係14件・2440万円、機械装置関係15件・1億8330万円、器具備品関係33件・1996万円、商品関係41件・4479万円、売上等その他の被害59件・2億9185万円）の被害結果が出ました。

片山鳥取県知事により鳥取県西部地震対策特別資金が創設され、私たちは、そのＰＲと融資斡旋に明け暮れる日々が始まりました。

平成12年度の斡旋総件数60件、3億6865万7千円（設備資金42件・1億2140万6千円、運転資金44件・2億4725万1千円）。その間、実際の被害も拡大し、被害件数117件・12億4977万円に達しました。

13年9月現在でも、同資金の斡旋を手がけているが、最終的には67件、5億382万4千円（設備資金49件・2億5657万3千円、運転資金44件・2億4725万1千円）に拡大しそうです。しかし、町内事業者の大半は地震の影響による売上高の減少によって資金繰りなどに苦慮していることは

言うまでもありません。

地震被害はまだまだ拡大しています。地震の後遺症が早く癒えることを願うものです。

大震災を顧みて　（下榎　八谷佐千子）

平和な日野町に思いがけない大震災が発生しました。この世の地獄を思わせるような地震でした。震源地に近い山寺の老いの夫婦をお守りいただいた御仏様に有り難い感謝の気持ちでいっぱいでございます。この頃の気持ちを俳句と短歌にあらわしました。

・秋寒し　地震の傷の　深さかな
・震災の　つめあと深く　冬迎う
・震災の　後追ひかけて　冬来る
・義援金　貰う身となる　師走かな
・平和なる　秋の最中の　大地震
・雨もりを　防ぐテントに　秋時雨
・ご先祖の　倒れし墓に　雪の舞う

・激震に　堪えて不動の　ご本尊
　老いの夫婦を　守りたまえる
・戦災も　うけず　過ごして来たる今
　老いて身にしむ　地震のすごさ
・震災で　倒れし墓を　たてなおし
　僧侶の読経　山にこだます
・石灯籠　倒れしままの　境内に
　春は巡りて　桜花爛漫
・外観は　あまり見えざる　震災の
　傷の深さは　中にひそめり
・地蔵尊　大震災に　おけがなく
　延命の水　守りくださる
・半壊と　いわれし庫裏の　中に住み
　余震あるたび　心ざわめく
・震災の　重荷背負いて　息子等の
　歩む人生　気になる余生
・震災で　くずれかけたる　石垣に
　草のびのびと　命たもてり
・あちこちに　新築の家　たちならぶ
　皆震災の　重荷かかえて

デイサービスセンターでの避難者

相互扶助の心 （根雨　森田順子）

あの日、私は東郷町の水明荘にいました。「地震だ!」その瞬間、みんな机の下に隠れました。テレビは境港市の被害を報じ、電話は通じませんでした。急きょ日野町に帰ると、道路の陥没や土砂崩れがひどく、まるで悪夢のようでした。留守番をしていた母は、ご近所の方のお世話で広場に避難していました。その広場では、ボリュームを上げた郵便局のラジオが地震のニュースを刻々と伝えていました。突き上げてくる余震のなか、「公民館が避難所になった。家の片付けが終わったら出勤を」との電話連絡。散乱した部屋を片付け、2日目にはお墓や寺の開山堂、友人宅に行きました。目の前に広がる被害の大きさにあ然としました。あのすさまじい光景が今でもフラッシュバックしてきます。もとに戻るまで何年かかるのか、何もできないというジレンマと悲しみでいっぱいでした。

公民館は2週間、被災者のための避難所、ボランティアの宿泊場所になりました。プライバシーのない不自由な生活のなか、皆さん力を合わせてよく頑張られたと思います。
館内では「こんなときだからこそきれいに」を合い言葉に、ごみの分別と掃除に協力をいただきました。あの非常時に水洗トイレが正常に使えたことは不幸中の幸いでした。神戸からのボランティアさんが公民館に入ってくるなり、「ここが被災地？避難場所とは思えない」とおっしゃいました。それぞれの立場を自覚し、公共施設を大切に使ってくださった利用者の皆さんのお陰だと思いました。「元気？大丈夫？」とお互いの安否を確かめ合い、必要最小限のものさえあればいいと思ったあの日が昨日のようです。県や町、そして大勢のボランティアに助けられて今日も復興への歩みが続いています。

『ボランティアからいただいた相互扶助の心』『日頃からの近所付き合い』『備えあれば憂いなし』など、このたびの地震で大切なことを教えていただきました。

心をひとつに復興をめざして （下榎　谷口祥侍）

地震が起きたとき、私は下榎地内の工事現場で重機の運転をしていました。一瞬何が起きたか判断できませんでした。後ろを振り返ると、法面が崩壊しているように見えました。死を覚悟しました。なんとか重機の転倒はまぬがれたので、すぐに飛び降り高台に駆け上がって見ると、地区の空が茶色に染まっていました。これはたいへんな事態だと、最初に思ったのが、火災が起きたらたいへんだということでした。地区内の道路を上から下まで「ガスの元栓を締めてください」と、叫びながら走っていました。倒壊している家もなく助けを求める声も聞かなかったので、ホッとして道路に座り込みました。ふと、従業員とその家族の安否を確認しなければと思い、また駆け回りました。何とか皆の無事が確認できたので自宅に帰って中をのぞいたとき、もうこの家には住めないと感じました。ガスの元栓を締め、電気の元を切ってひとまず事務所に行きました。その途中、「家の下敷きになっているので助けて」と叫んでおられたので、場所と状況を聞き、会社のユニック車で駆けつけました。すでに大勢の人が救出活動をしておられて、間もなく無事助け出すことができました。そうこうしているうちに夕方になりましたが、どこの家もとても炊事ができる状況ではないことに気がつき、みんなの協力で作ってもらったおにぎりを「下榎老人憩いの家」で食べてもらいました。その頃になってようやく全住民の安否が確認できました。もっと早くに確認できるような体制つくりが必要だったと思います。ようやく皆の寝る所の確保ができたものの、明日からどうしたものかと途方に暮れていた夜中の2時頃、小谷支部長が出張先の東京から急きょ帰ってこられたので、今後の対応について相談し

ました。とりあえず独自の対策本部を設置し、住民への対応にあたろうということにしました。

一夜明けてこれから何をしたらと考えていたとき、神戸の「元気村」から、ボランティアの方が駆けつけてきてくれ、いろいろ指導いただきたいへん助かりました。それからは地区住民とボランティアの皆さんと協力して復興にあたることができました。

この震災では、住民一人ひとりが、自宅のことよりもまず、地区全体のことを考え団結して復興にあたりました。。本当に素晴らしいことだと思います。このことを大事にして、これからしっかりとした防災組織を作らなくてはと考えています。

困ったことは、家が安全かどうか何を目安に帰宅の判断したらよいのか分からないことです。結局は自分の身は自分で守らなくてはならない、自分で判断するしかないのだと悟りました。もうひとつは、避難所の人数が毎日変動するので、配給される弁当の数の取りまとめに苦慮しました。

最後になりましたが、鳥取県独自の災害支援制度にとても感謝しております。お陰でそんなに落ち込むことなく復興にあたることができました。本当にありがとうございました。

全国から駆けつけたボランティアが応援しています

（ボランティア　山下弘彦　鹿児島市）

たまたま米子駅前で地震に遭い、ひと月後のニュースで「ボランティアの人手が足りない」ことを知って日野町にやってきた。11月後半には強風が吹き、屋根シートの張り直しに追われた。「雪が降る前に終えなければ」、一心に作業をしながら、おうちの人と話をするうちに、震災による痛みをひしひしと感じた。この縁で、2月から3月にかけて高齢者への聞きとりニーズ調査に深く関わることになった。 そこでは、一人暮らしの方を含め、高齢者の「自分でがんばらねば」という気丈な姿に感服する一方で、「人に頼ってはいけない」気持ちが、生活を窮屈にしているという面もあるのではないかと感じた。ボランティアへの依頼は減ってきたが、震災後の片付けなど自分では手に負えないで残したまま、春を迎えようとしていた方が少なからずあった。気丈な方でも、先々への不安を抱えているところに震災の重圧がかかっている。地域でのボランティア活動として、話し相手がいることでせめて気が楽になったり、生きがいを感じられたりする機会を作っていけないか、それが町全体を元気にすることにつながるのではないかと感じている。

米子市から、鳥取市から、島根県大田市から。今も町外からボランティアが来て、活動は続いている。何度も日野町を訪れるうちに、ここに住む方のことが気になり、「自分にできることがあれば、助けになりたい」それだけの気持ちでやってくる。年末以来、姫路市から来られる方もある。すでに足が遠のいていても、日野町はその後大丈夫だろうか、あのとき会った人は元気だろうかと心配している人が全国にいる。震災で経済的にも精神的にも大きな痛手を受けて、それは今も続いていると思う。けれども、全国から駆けつけたボランティアは、今も日野町のことを気にかけ、震災を乗り越えて、災いを福に転じるほどに元気な町になることを望んでいる。そんな多くの人たちがいることを忘れないでほしい。

立ち上がりへのトンド祭り　（前黒坂上３区自治会長　牧智也）

朝起きてみると、音も立てずに雪が降っていた。昨日の夕方には、舗装道路上の雪は解けて、会場の小学校の校庭は低い方へ雪解け水が流れている。「トンドさん」の中心になる青竹も立てられ準備は完了、あとは「参加者がどれだけ‥‥」と、心配するだけだった。

私たちの黒坂地区コミュニティー推進協議会の一部門、「人材育成部」担当の伝統行事伝承事業となっている「トンドさん」の早朝（１月１４日）は、深夜から約25センチの積雪。そのうえ、止み間なく降り続いていた。自宅玄関前の雪かきもそこそこに学校へ行くと、テントを張る場所は、仮設住宅におられる担当部長の梅林さんや恩田さん、１区自治会長の荒木さんに雪かきしてもらっていたらしいが、そこもみるみる積もっていった。私は準備に関わってもらった多くの皆さんに感謝しながら、雪が小降りになることと参加者の多いことを祈りつつ、あらためて雪かきをしながら開会の時刻を待った。

黒坂地区はほとんどの家屋が被害にあい、街部では解体により空き地ができてしまった。「あのしっとりとした町並みはもう見れませんかね」と残念そうに言う人が何人もあった。
町のイベントがすべて中止となり、産土神社の例大祭も見送られるというような状況のときにトンドさんをしたものかどうか、という心配もあったが、逆にこのようなときだからこそ実施して、滅入りがちな気持ちを乗り越えて、復興第一歩への心の支えになればとの思いの方が強くあったのである。

梅林部長のご努力により、黒坂地区連合区との共催として、地区をあげて開催できることにもなった。また、ボランティア部の協力で、参加者にぜんざいをふるまうことができ、天候にこそ恵まれなかったが、参加いただいた多くの人に喜んでもらったと思う。

開催までいろいろ迷ったが、今ではやってよかったなぁと心から思っている。

平成13年1月14日、黒坂小学校校庭で伝統行事「トンドさん」が開かれた

天人常に充満せり　（日野病院長　堀江裕）

地震発生直後、日野病院では、20分間という短い時間に入院患者さん74名をひとり残らず中庭に運び出しました。その内10名は、夕方には17キロ離れた隣の日南病院に引き受けてもらうことができました。当時、私は岡山から12時15分発の特急やくもに乗り、新見を少し過ぎた地点のトンネルの中で、約8時間列車内に閉じ込められ、翌7日午前2時頃にようやく帰院しました。ただちに案内された根雨社会体育館の避難所は、さながら野戦病院のごときありさまであり、事のただならぬことを悟った次第です。

－病院閉鎖－発生後12時間たっての真夜中の会議のテーマは、避難している患者さんを今後どうするかでした。院内のひび割れもさることながら、屋上にある貯水槽が壊れてまったく使えない状態で、いつ復旧するか見当もつかないことから、すべての患者さんを近隣の病院に引き受けてもらうことに決めました。すでに新病院が日野川をはさんだ川向こうに完成していましたので、そのことが大きな心の支えになりました。山陰地方では1120年ぶりの大地震が、新病院引渡しが終わった直後に起こったということは、不幸中の幸いであったと思いました。翌10月7日、県内各地から応援の救急車で、西部地区内の病院に患者さんをまとめて面倒をみていただきました。患者さんの移送作業は午後2時には終わり、途方に暮れる間もなく、町の保健婦さんとともに町内9か所の避難所巡りをしました。10日からは、病院に隣接している築50年の木造の看護婦寮を使っての仮診療所に人員の2割を、避難所回りに3割、残りの5割の職員は新病院への引越し作業に全力をあげるという体制をとりました。

10か月が経過して、入院患者さんも例年と変わらない状態を取り戻して、普通の生活ができるありがたさを職員一同かみしめています。『衆生劫尽きて大火に焼くるともこの地は安穏にして天人常に充満せり』という有り難い仏教の言葉があります。生きとし生ける物がすべて死に絶えても、春になったら新しい生命は焼け野原から生じてくるといった意味だとのことです。大きな震災を受けても、町の復興は着々と進んでいるようです。過疎に拍車がかからないよう、病院も地域の元気の出る牽引者になるべく、気を引き締めている毎日です。

新病院建設に御尽力いただいた方々、震災でお世話になりました多くの関係者各位に心から感謝申し上げます。　　－冷めやらぬ余震の後の引越しに職員の背中躍動す－

仮設住宅入居と牛飼い　（下黒坂　梅林詢）

行政当局のご配慮をいただき、黒坂小学校校庭の仮設住宅に入居することができました。飼育している和牛(親牛2頭、子牛2頭)は、11月1日から3月29日までの5か月間、岸本町小林の大山放牧場に預けることにしましたが、牛のことにつきましては、稲わらの収納や切り込みと集荷、また、これからも継続するための和牛経営の支援策等の取り組みを、米子家畜保健衛生所の皆さんや鳥取西部農協の皆さん、大下家畜医院ご一家にたいへんお世話になりました。心から感謝しております。また、仮設住宅での生活をご支援くださいました、黒坂地区の皆さんにも厚くお礼申し上げます。

4月から手元に帰ってきた牛たちのために、仮設住宅から自宅のある下黒坂へ、約30分の道のりを毎日歩いて通いながら、牛飼いと農業にがんばっていましたが、体調をくずしたりして、なかなか思うようにはいきませんでした。最近になってようやく体調も元に戻り、明るい灯が見えてきたように思います。現在の状況を維持しながら、今後につなげていこうと思っています。

ボランティアコーディネーターの役割 （兵庫県社会福祉協議会　福島真司）

われわれ兵庫県社協関係者が到着したとき(10月11日)、すでに日野町ボランティアセンターは立ち上っていた。しかし現実は、ホワイトボードに住民の要請事項（ニーズ）と、ボランティアの氏名等を記入し、複数のスタッフが個々に調整を行っているという状態であった。日々増加する来訪ボランティアの受け入れと、住民からの支援要請のため、その調整作業はパンク寸前であった。われわれ社協のコーディネーターは、まずボランティアセンターの機能整備に着手した。「受付」「連絡調整」「総括・広報」の三つの機能に分化した。とくに「受付」については、ボランティアの受付と住民要請の受付の二つにし、それぞれ専用電話を設置した。この二つの部門に寄せられたものを連絡調整者（コーディネーター）が、個々の内容を検討しながら調整していく方法に改めた。これにより、効率的にかつ迅速に有効なボランティアの調整ができるようになり、また、住民要請の受付窓口を一本化したことにより、住民からの支援依頼も集約が容易になった。阪神･淡路大震災以来、大規模災害が発生すれば、全国からボランティアが支援に駆けつけるということは常識になっていた。しかしながら、鳥取県の中山間部に位置する高齢化率33パーセントという日野町の住民のなかには、初めてボランティアを見たという人が殆んどだったことだろう。また、困ったら役場へという意識が強く、他人にお願いすることを美徳としない日本的？な考え方が大多数であった。実際、日野町内から住民の支援要請の多くは、当初、町役場に寄せられていた。

震災から1年が経過したいま、日野町にはボランティアネットワーク組織も生まれ、住民意識も変化していると聞いた。確かにこの震災は人的･経済的に大きな被害を与えた。しかしながら、そこから新たな「大切なもの」が生まれてきているのは事実である。公的サービスだけでは、緊急時には住民生活を守りきることができないし、非公的サービスだけでも同じことである。

われわれが住み慣れた町で生活を続けるためには、ボランティアや社会制度などの社会的資源の活用が不可欠であり、それらをつなぎ合わせる連絡調整者がいてこそ機能するということが証明されたといえよう。これからの日野町の住民活動の展開に大いに期待する。

みそ汁づくりを通して （下菅　恩田記子）

あの日は「全国介護保険サミット」で米子のコンベンションセンターにいた。ものすごい揺れだった。午後５時過ぎに家に帰ってみると、息子夫婦の新居建設中の足場が崩れて、今にも道に倒れそうになっていた。母屋の方は大黒柱のところの大きな梁が外れ、家中の戸という戸が動かない。公民館にいってみると、皆さんが炊き出しをされていた。老人福祉センターでは、顔なじみの人ばかり、私はホッとした。翌日からはいろいろな所のボランティアさんが来て、後片付けやシート張りなど、立ち上がりへのケアを含めてやってくださった。このことは、私たちがお返しすることができないくらい、たくさんの人達の心をいただいたと感謝している。10月15日、町に買いものに行った帰り、老人センターに立ち寄って、大きな声で「みんな元気？なにか私にできることない？」と声をかけた。すると、「一日一杯のみそ汁が食べたい」と声がかかった。次の日から13日間、自分の家にある材料でみそ汁を作った。ときには、「山の茸の汁が食べたいなぁ」と希望があり、山で茸を取りながら、ふと下を見ると、大きな地割れがあり足が震えた。

10月28日、JA日野町支部女性会の役員会があり、朝市グループの野菜や、加工グループの味噌をいただいて、その後23日間の汁をつくることができた。女性会会員の善意の心がこもった「み

ボランティアによるブルーシート張り

ボランティアがみそ汁を

そ汁」ができて、どんなにか皆さんの元気の支えになったことかと感謝している。

町内の誰もが大小の差こそあれ、被害を受けているなかで、善意には善意の心が返ってくるということを実感した。だからこそ私は、11月13日最後の避難者が仮設住宅に入居されるまでみそ汁作りを続けることができたのだと思う。いまでは、私なりに立ち上がりへのお手伝いができたことに喜びを感じている。

過疎の町でのボランティア （ボランティア　井上厚史　浜田市）

10月8日の午後、島根県浜田市を出発し、浜田道－中国道－米子道を経由して日野町文化センターへ。そして、黒坂小学校の体育館に到着したときはもうすっかり闇の中だった。途中で目にした地割れや家屋の損壊は、阪神・淡路大震災の再現かと思われたが、体育館周辺の家屋にはそれほど大きな損壊は見られず、「震度は大きかったものの、被害はそれほどでもなさそうだ」と安堵して毛布にくるまった。しかし、翌朝から雨の中で始まった瓦レキの撤去作業をするうちに、神戸のときとは事情が違うことを思い知らされた。家の中をのぞき込んで、「なにかお手伝いすることはありませんか」と尋ねても、「あとで自分でしますから大丈夫です」というお年寄りの返事ばかり。見渡せば、家の中はタンスや食器棚が倒れ、何もかもが部屋中に散乱しているというのに‥‥。そのときはじめて日野町が過疎と高齢化に悩む町であり、リーダーシップを取れる若者がほとんどいないということに気がついた。「この町の復興は大変な難事業になりそうだ‥。」というのが当時の私の率直な感想である。

あれから一年、町内の方々の懸命な努力や町外ボランティアの献身的な協力により、町はしだいに元気を取り戻しつつある。しかし、神戸のときも、震災から一年以上が経過して、孤独死やふさぎこみ、閉じこもりが次々と表面化するようになった。高齢者が高齢者を支えている日野町の場合、住民の方々の負担はこれからも増えこそすれ、減ることはないだろう。どうすれば心の不安を取り除き、元気と自信を持って日野町に住み続けることができるのか、その答えを『日野ボランティア・ネットワーク』の活動を通して見守っていきたい。お年寄りの口から、「またいつでも遊びにきないよ」という声を聞けたとき、はじめて日野の災害復興が完了するのだと思っている。

ともに助けあった仮設住宅 （黒坂　恩田孝雄）

我われは、大地震で家が倒壊した者同士、互いに受けた物的・心的被害という共通点を持ちながら、黒坂小学校グラウンド隅の仮設住宅で、支え合いの生活が始まった。その中で、おのずと自治組織が形成され、何となくその代表者になっていた。

はじめは、町からの配布物などのお世話をするだけだと気安く思っていた。しかし、日々の生活の中で、互いにいろいろな申し合わせ事項等をつくる必要も出てきた。このようにして即席的な集団ではあるが、互いに助け合いながら生活していった。あるとき、各家の屋根で漏水が発生した。この修繕のために役場との交渉をしていく中で、お互いの気持ちがひとつに結びついていったような気がする。連帯意識や仲間意識が盛りあがる一方で、自宅の復興態勢を整えるために誰もが忙しくなってきたのである。

今年の4月に入ると、伊達さんが新築を終えて、仮設住宅から出て行かれた。さらには、6月に山形さん、8月には長尾登美子さん、9月には長尾君子さんと矢田川さんが去っていかれた。それぞれ自分の家の修復や新築が終わったことは、とても喜ばしいことではあるが、何箇月か共に過ごしたもの同士として寂しさが募る昨今である。誰からともなく、「お別れ会」をしようということになり、9月９日に実施した。全員楽しく、夜の更けるのも忘れて大いに盛りあがり、有意義な集いとなった。そのなかで、一年後には、全員もう一度出会う会を持とうということになった。

ともに苦しみを乗り越えて、これからも心がひとつに結びついていくことを願いながら、互いに復興と自宅が完成した喜びの涙をかみしめ合った「お別れ会」となりました。

地震とお寺の復興と人の心 （泉龍寺住職　三島道秀）

「和尚さん、わが家の石塔はいつ直るでしょうか。」と、この平成13年のお盆前にはよく尋ねられました。

石材店の顧客は、鳥取県西部全域にわたり、修理の順番が回ってくるまでにたいへんな時間がかかり、この対応に苦慮していると聞くと、あまり無理も言えず、未修理の皆さんには、石材店に代わって謝っていました。

平成13年９月１日現在、各石材店、ボランティアの方々の献身的努力により、境内地内の墓地･石塔は、約９０パーセントの修理が終わっています。しかし、「お寺の歴代ご住職の石塔がまだ直っていないのなら、もう少し我慢します。」と言ってくださり、静かに順番を待っていらっしゃいます。現実に、本堂・庫裏・位牌堂等の建物の屋根、壁や崖崩れの修復等に多額の費用がかかります。しかし、基盤である檀家様各家の被害が甚大なため、ご寄付を募り、各場所の復旧作業に取りかかるのを１年間保留とさせていただきました。明年には、各役員の方々と復興計画を起案してゆきたいと思っています。

地震発生直後から、多くの方に「がんばってください。」と励ましをいただきました。
そのときは確かにうれしかったのですが、数日たって、心身ともに疲れてくると、「がんばってください。」と言われるたびに、「これだけがんばっているのに、これ以上何をがんばれと言うのだ。」と思うこともありました。しかし、ある方が、「ともにがんばりましょうね。」と声をかけてくださったとき、こみ上げてくるものを感じたのです。ご位牌の無事を見に来られた方々の多くが他人には言えない疲労やつらさを心身に持っておられます。私から前記のことをお話しすると、堰を切ったようにご自分の思いを打ち明けられます。人間どこかでつらい